死神になった人間が妖怪のいる世界へ

カイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死神になった人間が妖怪のいる世界へ

【Ｎコード】
Ｎ９９８３Ｖ

【作者名】
カイ

【あらすじ】
死神の間違いで魂を狩られた人間が死神になって、ぬらりひょんの孫の世界へ

誰にでも間違いはある

はじめまして、オレの名前は赤神(あかがみ)カイと言います。

ちなみにオレは死神になりました（強制的に）

なんでも目の前にいる死神がオレの魂を違う人の魂と間違えて狩ってしまい、一度狩った魂は戻すことができないので、どうしようと悩んだ結果。

そうだ違う世界に送ろう。

だそうだ、しかし今のオレには肉体がないのでどうするのか聞くと、死神はまた悩みだした。そして

そうだ死神にしよう。という結果になった。

なんでも違う世界に行くには、人間の肉体ではできないので死神にしたらしい。

こんな感じでオレは死神になり、いつの間にか現れた違う世界に行くための扉の前に立った。

死神がプレゼントと言って渡してきたのは、黒いコートだった。
このコートの中は四次元ポケットのようになっていて今は大量の武器（ナイフや刀などいろいろあるが全て死神の鎌(デスサイズ)）が入っていてしかも、念じるとその念じた物になるらしい。

最後に死神が今から行く世界は妖怪がいるからね　と言う。

その言葉に顔を少し青くしながらも、扉を通っていった。

あれがやりたい！って時に、やれないことってあるよね。（前書き）

遅くてすみません。

これからもよろしくお願いします。

あれがやりたい！って時に、やれないことってあるよね。

カイｓｉｄｅ

扉を通った先は…真っ暗でした。

ここはどこだ？洞窟か？
とにかく進んでみるか。

オレは歩きはじめてすぐに異変に気がつく、何故か歩幅が小さい。
まさかと思い手や足を触る…案の定、オレは小さくなっていた。

何故小さくなった！
いつ小さくなった！
あれか、死神になった時の副作用か何か！
と、四つん這いで地面を殴りながら考えていると、後ろの方から悲鳴が聞こえたので、急いでその方向へ向かう。

向かう途中で　ゴバ！！　と何かが崩れる音がしたと同時に、向こうの方が騒がしくなる。

オレはさっきよりも急いで向かう。

しかしオレが着いた時には、騒ぎは無事に鎮まっていた。
よかった　と思っていたが、それは束の間なぜなら、オレの目の前には大勢の妖怪がいるからだ。

しかも妖怪の一人？がオレに気づき、
「奴らの生き残りがいたぞ！」

と言った。

なにこれ？今からオレ戦闘すんの？まだコートの中にある武器の確認してないんだけど、本当にやるの？

すると長い黒髪のお坊さんが杖で攻撃してきた。
杖を縦に一振りするが、オレはコートの中にある武器を取ってそれを防いだ。
あ！ちなみにコート（フード付き）は最初から着ています。

お坊さんは驚いて後ろに下がる。

お坊さんが驚いたのも無理はない。
オレだって驚いているんだから。

え？　驚いた理由？
それはね…

一番最初に手にした武器が　ハサミ　だからさ。
お坊さんはハサミで、攻撃を防いだことに、驚いているんだろうね。

オレは一番最初の武器が、ハサミだったことに驚いたよ。
しかも、ハサミの持つ所に紙が貼ってあり、それを見ると《紙や髪は当然だがこれは神も切れます（笑）ｂｙ死神》

もちろんこの紙は、びりびりに破り捨てたよ。

ハサミでどうしようかな？と考えている最中に、ヒモが飛んできた。
ハサミで切ったり、避けたりしていると、いつの間にか妖怪囲まれている。

目の前にはさっきお坊さんと、顔が浮いている人と、その他の妖怪がいる。後ろに出口があるが、首にドクロのネックレスをした大きな妖怪と、偉そうなヒゲを生やした妖怪と、その他の妖怪がいて、通るには妖怪を倒すしかない、しかしハサミでは難しい。

オレはどうするのか考えている。
妖怪達も何か考えているのか、動かない。
一分後、一番に動いたのは、あのドクロのネックレスをした妖怪だった。

オレは一分間考えた結果。

そうだ新しい武器をだそう。だった…
ハサミをコートの中に戻し、違う武器を手に持ち、振りあげる。

すると、オレに近づいていた妖怪（ドクロのネッ…以下省略）が斜め前の天井にぶつかった。

オレは妖怪が斬れていなかったので、ハンマーか？それとも、まさかのバット？
と思って振りあげるた武器を見る……
これは武器なのか？

オレが持っていたのは、芝刈り機…
ハサミと同様に持つ所に紙が貼ってあり《芝は当然だがこれは神の髪も刈れる（笑）ｂｙ死神》だってさ。

さっきも思ったけど、ギャグのセンスないな、あいつ（死神）

突然、出口付近の天井に大きな亀裂ができた。

さっきの妖怪がぶつかったのが原因だろう。

オレは、天井に亀裂ができるのを見た瞬間に動いた。

なぜなら、天井の落下点には人間の子供たちがいたからだ。

オレはすぐに天井の落下点に行き、怪我のない男の子は、妖怪達に向かって蹴り飛ばし、

怪我をしている男の子と女の子は、妖怪達に向かって優しく投げて渡す。

あと女の子一人のところで天井が崩れる。

妖怪達に投げ渡すのは間に合わないので、オレが覆うようにして女の子を落ちてくる天井から守った。女の子は気絶しているが、無傷であった。

カイ「無事でよかった。」

オレはすぐに、女の子を助けられた安心感と、はじめての戦闘の疲労があったからか、気を失った。

ちなみに、カイはすぐに奴良組の妖怪に助けられたが、頭からは妖怪が慌てるほどの血を流していたらしい。

オレの正体は……（前書き）

（小説書く）速さが足りないｏｒｚ

楽しんでもらえればうれしいです。

オレの正体は……

ぬらりひょんｓｉｄｅ

「どうするかの～～」

ワシは今どうしようかと悩んでいる。

目の前の布団の上で横になっている赤い髪の少年は、一週間寝たきりの状態でいつ目が覚めるかわからない。

しかも、少年がこうなったのはウチの妖怪が関わっているため、何かしら責任を取らないといけない　と思い、今ウチで看病している。

しかし、少年の看病に反対する妖怪もいた。

理由は簡単で、正体のわからない者を組に置いておくのは不安だったんだろう。

ワシは反対する妖怪を説得して、少年の看病しているがワシも不安でいる。

なぜならこの少年、見た目はリクオと同じくらいの子だが、首無たちが苦戦するほどの実力を持っている。しかし少年からは妖怪の雰囲気のようなものは感じられない。

むしろ、雰囲気だけなら人間に近い。

けれど、人間ではありえないほどの血を流したと聞いた。

この少年は何者じゃ？

「う～～～ん」

どうやら起きたみたいじゃの。

さて、少年が何者なのか本人の口から、聞くことにするかの。

カイｓｉｄｅ

「う～～～ん」

頭が少し痛む、たしか女の子を落ちてくる天井から守って、それから……気絶したんだっけ？

とりあえず起きるか。

カイ「よ…い…しょ…と」
体が少し動かしにくいが、なんとか上半身を起こした。

爺さん「気分はどうじゃ？」
いつから居たのかわからないが、オレは質問をしてきた爺さんを見て一言。

カイ「頭どうなってんの？」
と言った。

爺さんは呆れながらも
爺さん「頭のことよりも他に聞くことがあるじゃやろ、例えば…ここはどこだ？とか、お前はだ？とかいろいろ聞くところじゃろ。」
たしかにいろいろ聞きたいことはあった。

しかし、目の前にいる爺さんを見て、頭のことを聞いた。

だって爺さんの頭……長いんだよ！？

物で例えるなら……
チョココロネ？
いや、違う！
フランスパンだ！！

フランスパンのような頭をした爺さんに頭のことを聞いてもダメみたいなので、

カイ「ここはどこだ？あんたは誰だ？それとオレは誰だ？」

爺さん「ここは奴良組本家の屋敷で、ワシはぬらりひょんじゃ。それと、おめぇさん何者じゃ？」

ボケたのにスルーされた……腹すいたな……そうだ！正体を教えるかわりにご飯を貰えばいいんだ！

カイ「オレの正体を教えるかわりに、腹いっぱいになるまでご飯ちょうだい。」

ぬらりひょん「わかった。すぐに用意させる。それで、おめぇさんは何者なんじゃ？」

カイ「オレは……死神ＤＥＡＴＨ！！」

この後台所は、大忙しだった。

ぬらりひょんｓｉｄｅ

赤髪の少年こと　カイはまた寝ている。

この子の正体が死神とはのぉ。

他の奴らにどうやって説明すればいいのやら……

それにしても、この子…見たことがあるような…ないような…ま、

気のせいじゃろ。

赤神カイの憂鬱？（前書き）

サブタイトルいいのが思いつかなかったｏｒｚ

赤神カイの憂鬱？

ガゴゼの起こした事件から数年後…

ぬらりひょんｓｉｄｅ

リクオの三代目襲名の会議をやったが、今年もダメじゃった…

リクオ「いってきまーっす！」

リクオはあの事件以来、妖怪にはなっていない…むしろ《立派な人間》になっている。

ぬらりひょん「あいつが三代目を継ぐのは…いつになるんじゃろうの～～～」

とリクオを見送りながら、隣にいる木魚達磨に言う。

木魚達磨「さぁて…どうなりますか……？」

と返事が返ってくる…

そこへ…

？？？「ふぁ～朝から元気だね～リクオは…」

と今起きてきたカイが来た。

ぬらりひょん「やっと起きたか、この寝坊助が！お前も早く行かんか！」

カイにはリクオの護衛を頼んでいる。

カイ「はぁ…わかってるよ……憂鬱だ…顔洗いに行こ。」
と答え行こうとしたが

木魚達磨「カイ様に説得を頼んでみてはどうでしょう。」
とワシに小声で言ったのが、カイには聞こえていたらしく

カイ「オレは説得しないぞ！やらせるなら、鳩〈ぜん〉にやらせろよ…義兄弟なんだろ？あと三代目候補にもならないからな！！」
と言って、行ってしまった。

木魚達磨「総大将…今の話しはいったい？」

今の話しとはカイが、三代目候補にはならないと言ったことだろう。

ぬらりひょん「ん？ちょっとな」
とごまかした。

いつまでも三代目の候補すら居ないのはまずいと思い、前にリクオが継ぐまで三代目候補をやってくれないかと頼んだが、すぐに断れた。

理由は、そのうち自分で組織を作る可能性があるからとか、めんどくさいとかいろいろ言っていた。

ぬらりひょん「いつになったら隠居できるかの～」
と呟きながら部屋に戻る。

カイｓｉｄｅ

全くあのジジイは、リクオに関係することはすぐにオレに頼る、さっきの説得の話しもリクオがやる気になるまで待てばいいだけだろ。

今オレは学校に行く準備をしている。本来なら、学校に行かなくても問題ないんだが、リクオの護衛を頼まれているので、行かなければならない。

ちなみにオレは奴良組には所属していない。

なのでリクオの護衛を断ってもいいのだが、衣食住の保障＋報酬を出すと言ったのでやっている。

報酬はまだ何にするか決めてない。

え？なんで報酬は金じゃないのかって？だってコートの中にいっぱい入ってたから、別の物がいいと思って決まったら言うことになっている。

準備ができたので玄関に向かうと、雪女の《つらら》とリクオのお母さんの《若菜さん》がいた。

若菜「はい、これお弁当とお茶ね！あと朝ご飯食べてないでしょ！おにぎり作って入れといたから、

ちゃんと食べるのよ！」
と水筒と包みを渡される。

カイ「ありがとうございます。つららはどうしたの？」
と聞くと

つらら「どうしたの？じゃありませんよ！！カイ様が遅いから待っていたんじゃありませんか！！」
と怒られた。

先に行ってればよかったのに…と思ったのも

カイ「待っててくれてありがとう。」
とお礼を言うと、つららは何故か少しボーッとしている。

カイ「ほら、行くぞ！若菜さん、行ってきます！」
と玄関を歩いて出て行く。
少ししてから

つらら「カイ様！待ってください！！あっ！若菜様行ってまいります！」
と慌てながら出て行った。
若菜「行ってらっしゃい。」
とそれを見て微笑みながら二人を見送った。

若菜ｓｉｄｅ
つららちゃんカイ君のことが好きなのかしら？お礼を言われた時、顔少し赤くなったように見えたんだけど…
そうだとしたら、敵は多いいわよ…まぁ“お姉さん”の女の勘なんだけどね。
フフフ、どうなるのか楽しみだわ。

注意；若菜さんはまだ３０歳と若い方だが、子持ち…“お姉さん”

よりは、どちらかといえば…おばさ…えっ？なに？お、落ち着いて！！ちょまっ！！ぎゃあぁあぁあぁ！！！！

赤神カイの憂鬱？（後書き）

最後のはあまり気にしないでください。

若菜さん１８歳ぐらいでリクオを産んだんですね…

ウチの母もあんな人だったら…

もしかしたら、番外編で空白の数年のことを書くかも…

もしリクエストがあれば教えてください。

そのリクエストにできるだけ、答えるつもりですが、作者には実力がないので……

これってあり？

カイｓｉｄｅ

カイ「眠い……」

つらら「カイ様！ボーッとしていたら、こぼしますよ！」

今オレは、眠気と戦いながら朝ご飯を食べているが、ボーッとしたりこぼしそうになると、隣にいるつららに注意される。

カイ「ごちそうさまでした。」

なんとか朝ご飯を食べて、学校に行く準備をし玄関に向かう。

途中の廊下で青田坊達とリクオが言い争いをしている。

朝から騒がしいと思ったら、あいつらか……よし！一番うるさい青田坊を黙らせよう！！

気付かれないように青田坊に近づき、青田坊の後頭部にオレの手をつけて、その手を庭の地面に目掛けて振り下ろす。すると、ドーンと大きな音がして地面には、小さなクレーターができた。

その後

カイ「青田坊…朝っぱらから騒がしくするな！近所に迷惑になるだろう！」

と言って玄関へと向かった。

カイが去った後、さっきのことを見ていた妖怪はみんな、『あんたの方が余程迷惑だよ……』と思っていた。

リクオｓｉｄｅ

僕は今、カイ君と一緒に登校している。

それにしても、カイ君って何者なんだろう？といつも思う。

じーちゃんは、遠縁の子だって言ってたけど…今朝のことを見たら人間とは思えない…けれど妖怪とも思えない。

と考えていたが、いつの間にか学校の前まで着ていた。

リクオ「（む…誰か…ついてきてる気がする…）こら！！カラス天狗！！いくら心配だからって学校まで」

と言って振りかえると、そこに居たのはカナちゃんだった。

カナ「わっ……リ…リクオ君～～～…？なんの…つもりなの～～…」

と怒っている。

リクオ「カッ…カナちゃん！？」

カナ「私を…殺す気！？」

リクオ「そ、そんな…ゴ、ゴメンなさい！！（あれ～おかしいな～たしかに…）」

と慌てながらも謝っていると突然、ドンと後ろから衝撃が…おそらく島くんだろう…

島「おはよう～奴良～～どーしたんだよ。朝っぱらからケンカかー？」

と挨拶し、続けて

島「アレやった？アレ～」

リクオ「え～？何だよ～？（ああ…この感覚…これぞ…普通な朝の風景…）なーんて　もちろんだよー！！」

と宿題を渡す。

島「うおーすげー　あとさー悪いけどさー」

と島が言いかけるが

リクオ「あ！ハイハイ！まかしといて！！お昼も買っとくから！！ヤキソバパンと野菜ジュースね！」

と言い終える前に答える。

島「わかってんじゃーん奴良～～ほんっとお前良い奴だよな～」

と言って校舎に向かう。

リクオ「（ほめられた～人によろこばれた、嫌われてない、これすなわち妖怪の真逆……イコールバレない）よし！カナちゃん！カイ君！僕達も行こう！」
と周りを見ると、二人の姿が見えない。

まさか置いてきぼり！？

急いで追いかけないと！！

次に二人を見たのは、教室で仲良く話をしている姿だった…

カイｓｉｄｅ

今は昼休み…
オレは、一時間目から今まで寝ていた。
本当は、放課後まで寝ている予定だったんだが、なんか騒がしいので起きた。

教卓の方を見ると男子生徒が、ノートパソコンを広げながら話をしている。

内容は、妖怪がどーのこーのとか、ある時見たあるお方達にもう一度会いたい…とか、旧校舎がどーとか話をしていた。

気になることが一つあったが、とりあえず昼ご飯にしよう。

若菜さんが作ってくれた弁当を広げ。

カイ「いただきます。」
と合掌してから食べる。

オレが起きたのに気付いたカナは、オレの所に来て

カナ「カイ君やっと起きたんだ……」
と苦笑いする。

カイ「…もぐもぐ…なんか…もぐもぐ…　騒がしかったから…もぐもぐ…目が覚めた…もぐもぐ…」
と弁当を食べながら答える。

カナ「食べながら喋るのやめなよ…」
と注意されるが

カイ「ごちそうさまでした。もう食べ終わったから、大丈夫。」

カナ「食べるの早いね！！」
と驚かれた。

カイ「そうか？オレは普通だと思っているんだけど…」
と言ってお茶を飲む。
そうだ！ついでに、さっき気になったことを聞いてみよう。

カイ「カナ、さっきのことで気になったことがあるんだけど…聞いてもいいか？」
と質問する

カナ「さっきのこと？（清継の話のことかな？）別にいいけど…」

カイ「本当か！じゃあ…ノートパソコンを学校に持ってくる。これってあり？」

カナ「気になったのそこぉ！！」
とツッコミを入れられた。

普通だったら気にするよね？

没収されないのかな～とか思うよね？

ま、いいか…オレも明日から持って来よう。

その日を境目に、オレが授業中に寝ている時間は少し減った。

これってあり？（後書き）

清継のノートパソコンを何故学校の先生は没収しないんですかね？

設定（前書き）

今のところの設定です。

追加することがあると思います。

ネタバレ？が少しあります。

設定

名前
赤神(あかがみ)カイ

性別　男

年齢１２歳？

容姿　イケメンで髪は赤い髪が腰の辺りまであり、身長は１６６ｃｍと中１にしては大きめ？

能力
神の頭脳（偽）：神よりは劣るが、理解力、応用力などが人間の何倍もあり、完全記憶能力をもつ頭脳。

所持品
死神のコート：コートの中は四次元ポケットのようになっており、死神の鎌の他に金や仮面などが入っている。
また、念じるとその念じた物になる。

コートの中の整理はまだ終わってないらしい。

仮面：コートの中にあり、気に入ったやつは戦う時に着ける。

死神の鎌(デスサイズ)：あらゆる物を切ることができ、いろいろな形（武器）がある。形（武器）によっては、切るではない場合がある。〔例〕トンファーや銃。

カイのコートの中には未完成の死神の鎌も入っていたとか…

未完成の死神の鎌：完成はしてないが強力。
いつ完成するのか、誰にもわからない。

説明
死神になって《ぬらりひょんの孫》の世界に来た。
今はリクオの護衛をしている。
神の頭脳（偽）を使い、自分でオリジナルの式神を作った。
学校に行く時は式神や死神の鎌を持って行く。
奴良組にいる、ぬらりひょん以外の妖怪はカイのことを「カイ様」と呼ぶ。
奴良組には所属しておらず、傭兵としてリクオの護衛をしている。

名前
死神

容姿　ソウルイーターの死神様

説明　カイを死神にした奴。

カイ曰く、ギャグのセンスはなし。

旧校舎に潜入しよう！！（前書き）

更新が遅くてすみませんm（＿＿）m

短いですが楽しんで貰えればうれしいです

旧校舎に潜入しよう！！

リクオｓｉｄｅ

今僕は、夜の学校のグランドの近くにいる。

なぜ僕が夜中に来ているのかと言うと、清継君が昼休みに話をしていた旧校舎にもし…うちの組の奴らがいたら……それにみんな危険にさらすわけにもいかないから、旧校舎の調査に参加することにした。

清継「よし…そろったね、メンバーは7人か…」

と参加する人の人数を確認する清継くん。

7人か…意外といるなー。どんな人が来てるんだろう？

僕は参加者を見る。

リクオ「ん？カナちゃん！？…なんで！？怖いの苦手なんじゃ…」

カナ「う…うるさい～いいでしょ！？」

と少し焦っている。

カナ「リクオ君こそ何でよ～」

と聞かれ

リクオ「え…」

どう答えるか考えながら、カナちゃん以外の参加者を見ているとその中にカイ君がいた。

リクオ「な…なんでカイ君がいるの？」

カイ「ん？オレか？オレはカナに呼ばれた。」
とカナちゃんを指差している。

リクオ「そうなんだ…（カイ君がいるなら心強いけど油断しないでおこう）でも、それは何に使うの？」
とカイの持っている物を指差す。

カイ「これか？これは、潜入するのに役立つと思って持ってきたんだが…いらなかったか？」

僕は逆に何故そんな物をいると思ったのか知りたい…

だってカイ君が持ってきた物って、ダンボール（大きめ）だよ！？
ダンボールなんて何に使うの！？

リクオ「カイ君…ダンボールなんて必要ないと思うよ。」

カイ「そんな…せっかく用意したのに…」
と落ち込むカイ君。
しかし、すぐに立ち直り

カイ「一回も使わないなんてもったいないな……と言う訳でリクオ

一緒に入るぞ！」
とよくわからないことを言ってきたので
リクオ「え、遠慮しとくよ。」
と断った。
カイ「じゃあ…カナ一緒に入るか？」
とカナちゃんに聞く
カナ「えっ！？私！？えっと…／／／」
と顔赤くしている。
するとその時
清継「お～い！そこの3人、そろそろ行くよ～」
と声をかけられた。
カイ「ダンボールは今度でいっか～。ほら！リクオ！カナ！行くぞ！」
とダンボールを置いて、清継くん達の後を追った。

カイｓｉｄｅ

今オレ達は道路を渡り、旧校舎の入口の前にいる。

オレ達とは、参加者のオレ、カナ、リクオ、島、清継、倉田（青田坊）、つらら（雪女）の7人のことだ。

ちなみに、リクオはまだ雪女と青田坊のことは気づいていない。

旧校舎の中に入り調査するオレ達…美術室や給湯室、トイレなどを調べた。結果から言うとここに妖怪はいる。オレは何度も妖怪を見た、しかしカナや清継それに島は見ていない。

なぜならリクオが、頑張って彼らに妖怪を見せないようにしているからだ。

しかしリクオもさすがに疲れているようだ。

清継「ここでラストかな？お、食堂だって。」

頑張れリクオ！次で最後だ！！

え？リクオの手伝い？全くしてないよ。

理由？理由はカナが服をずっと握って、リクオみたいに素早く動け

なかったから。

リクオｓｉｄｅ

ハァ…　ハァ…

ありえねーーーーー

カイ君がみんなの気をいろいろな話で引いてくれてはいたが…とても一人じゃかばいきれない…バレるバレないじゃなく…このままじゃみんなに危険が…

清継「ここでラストかな？お食堂だって。」

まずい、みんなが先に行ったら…

リクオ「あっ…ま…待って！」

しかしみんなは待ってくれない。

島・清継「……え？」

先に食堂に入った島くんと清継くんが止まる。

まさか！！

急いで食堂に入ると…食堂の隅に妖怪が六匹いた。

リクオ「……し…（しまった！！）」

妖怪「あああああああ」
と襲って来る妖怪達

島「うわぁ…あぁぁぁぁぁ」

清継「で…出たあああああ」

……くそ……どうする……全然
間に…合わない

？？？「リクオ様、だから言ったでしょ？」
と声をかけられた。

リクオ「え…」
次の瞬間、妖怪達は何故かここにいた雪女と青田坊によって倒された。

青田坊「こーやって若ぇ妖怪が……奴良組のシマで好き勝手暴れているわけですよ」

なんで雪女と青田坊がここに？

青田坊「ここはてめーらのシマじゃねえぞガキども……若…しっかりして下せぇーあなた様にゃ…やっぱり三代目継いでもらわんと！」

リクオ「……え？な…何？ど…どういうこと…？だって…今君ら学生で…うえ！？」

雪女「だから…〈護衛〉ですよ確かカラス天狗が言ったはずですけど。」

青田坊「４年前のあの日…これからは必ず御供をつけるって！」

雪女「知らなかったんですか！？ずぅ～～～っと一緒に通ってたんですよ！」

と言って雪女と青田坊は人間の姿に戻る。

リクオ「ずぅ～～っと！？ハァーーー！？聞いてない…聞いてないぞぉ～～～～～！？」

カラス天狗「いいえ確かに言いましたこのカラス天狗が」

と突然現れたカラス天狗が言った。

カラス天狗「まったく…心配になって来てみればあんな現代妖怪…妖怪の主となるべきお方が情けのうございますぞ」

と呆れているカラス天狗

リクオ「だからボクは人間なの！！」

と反論したが

カラス天狗「まだおっしゃるのですか！！あなた様は総大将の血を４分の１…」
と話が長くなりそうなので一言
リクオ「ボクは平和に暮らしたいんだぁ～～～～～！！」
と叫んだ。

次の日、何故かカイ君が青田坊を鍛えると言って、青田坊と闘っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9983v/

死神になった人間が妖怪のいる世界へ

2011年10月31日23時19分発行